

## 眞の生き方

### 名利の煩惱

「一。総体人には劣るまじきと思う心あり、この心にて世間には物を為習ふなり、仏法には無我にて候上は人に負けて信をとるべきなり、理を見て情を折るこそ仏の御慈悲よ、と仰せられ候。」

「二。人はあがりく／＼ておちばを知らぬなり。たゞ慎みて不断空恐ろしきこと、毎事に付けて心を持つべきの由仰せられ候。」

これは蓮如上人のみ教である。人は貪欲中心に生きる限り、如何に念仏するとも、み法を聞くとともに、必ずこの慈訓厳誠にそむいている。ましてや仏とも法とも思はざる人に至つては、ついに「人に劣るまじき」と思い「あがりく／＼ておちばを知らぬ」まゝに、空しくこの世を過ぎて行くのである。

たとえ、立身出世したとて、少しの金がたまつたとて、五欲貪欲、煩惱のみの生涯には、ついに尊き何物もなく、道も光も眞実の歡喜もないであろう。

しかして「総体人には劣るまじきと思う心」あるのも、「あがりく／＼ておちばを知らぬ」のも、共にこれ、人間の名利の煩惱のみに生きるが故である。

### 憍慢

「人はあがりく／＼ておちばを知らぬなり。たゞ慎みて不断空恐ろしきことと毎事に付けて心を持つべきの由仰せられ候。」

何故に上り上りておちばを知らぬ心を、慎みて空恐ろしく思うべきであるか。

その最第一の大怖畏は、大法耳に入らぬが故である。如何に眞実なる教えといえども、邪見憍慢なる心には受け付けられないが故である。

人生にて眞実なる教えを聞かず、大法に値わずして、あたらず徒食する、これに過ぎたる不幸があり得ようか。

眞実教に値いたまいしが故に、不朽の聖者親鸞生れ、これなかりしが故に世に多くの悪逆が生れるのである。

せつかく念仏の世界に足を踏み入れつつ、上り上りておちばを知らぬ故に、本願の眞髓にふれず、大信成就せずしておわるのである。蓮師の厳誡したもうゆえんであるか。

上り上りて頭を下げず、大法耳に入らぬ者は、ついに如来の眞実にふれず、内なる邪見我慢を見ず、合掌せず。かかる人はいたずらに怒ることのみ多くて、愚痴の心深く、人を見下し、人と争い、貪欲の満足のみ走るが故に、家にあつては家を暗くし、世に出でては世間の闇の中心となる。

「不断空恐ろしきことと毎事に付けて」慎め、と言われるゆえんであろう。大法により頭を下げて生きる人は必ず世の光となる。

### 唯この心に

「総体人には劣るまじきと思う心あり、この心にて世間には物を為習ふなり。」

上りく／＼ておちばを知らぬ心は、これが人に対する時「劣るまじきと思う心」となる。世間ではこの心のみにものを言わせる。名利の心、勝ち魂である。人に劣るまい。人に敗けまい。人の後につくまい。人に馬鹿にされまい。地位を得よう。名高くなろう。人に従うまい。人を従えよう。こうした心で世間の事はなされてゆくのである。

人はただ営々としてこの心に使われて、苦を増しつつ死んでゆく。

### 無我

「仏法は無我にて候上は人に負けて信をとるべきなり。」

仏法は無我にて候。

上り上る心も、劣るまじと思う心も、共に不純なこまじやくれた我に過ぎなかつたのだ。

如来の大悲はこの我を打ちのめし、我を我と知らしめ、無我の心を成就して下さるのである。

「仏法は無我にて候上は人に負けて信をとるなり。」

「負けて信をとる」、信を獲得することこそ最大の肝要である。「人に負けて信をとれ」とは有難きみ言葉である。負けてく／＼負けぬくことこそ信をとる道であった。負けるとは無我を意味し、信とは如来に生きることを意味する。人に生きずして如来に生きる。人において負けて、如来において勝れたる者こそ、無我の信の人であった。

2

まけるとは

人において勝とうとすれば、ますく／＼我になつて、勝つて淋しく、負けて残念である。

真に負けるとは「仏法は無我にて候上は、人に負けて信をとる」ことである。しかして、かゝる意味で真に負けるとは、勝ち負けを決しようとする心、勝敗の心そのものを超えることである。

勝敗の心は我より生れ、信は如来に通ずる無我の心、如来廻向の心である。

### 諍論

「諍論のところには、もろく／＼の煩惱おこる、智者遠離すべし。」

これは一つの尊重すべき仏戒である。

世には仏法について、他人と理論闘争して勝とうとする人がある。もつての外のまぢがいである。

「学問して人の誇りをやめん、ひとへに論議問答旨とせん。」とする人は、すでに如来を見失い、我をつのらせて、恐るべき邪道に入れるものである。

仏道はただこれを讃嘆すべし。

信は礼拝讃嘆となつて現れ、上りく／＼つて勝たんとする心とならず。

勝たんとする我慢、汝の最大の怨敵と思うべし。

汝を暗くし、汝を空疎にする原因である。

## 理と情

「理を見て情を折るこそ仏のお慈悲よ。」

これ真に頂戴すべき金言である。一生これを服膺ふくようして忘れず、今日一日の心得とすべきである。世間多くの念仏者は、情によつて理を歪め、煩惱の言うまゝを通して、理を棄て、他力本願の教えを、そのあさましき現実の言いわけに使う者ほとんどである。

「理を見て情を折るこそ仏のお慈悲よ。」

己を空しうし、低うして、み法を聞き、教えを聞くべきである。しかして理の正しきを知れば、翻然として情を折り、理に随うて生きさせて頂く時、そこに念仏の美しき生活は生れるであろう。仏のお慈悲の深さを知るであろう。

## 大法を聞け

されば、壁に耳をよせてみ法を聞け。

地に耳をよせてみ法を聞け。

たとえ目下の者の言葉なりとも、道理と知れば情を折れ。

いわんやみ法の説かれる聖会に値もうあうことあらば、いよく恭敬合掌して、言々句々、全身を耳にして聞くべきである。大法に対して無我である時、大法は初めて汝の心の食となり、やがて真の力となるであろう、大法を離れてついに人生何ものもなし。

3

## 真の生き方

教法を我よりも高くし、教法の前に低く合掌する時、教法は絶対の權威を持つて、我に君臨し、我らの誤謬あやまりを打ちくだいて、我を大法の如くならしめ、内に充実して、ますます低くく生かされるであろう。内に充実せざる者は、水に浮べる軽石の如く、上りくくしておちばをしらず、ただ他人にたいしておとるまじと、負けじ魂のみに乗つて、外へ外へと流転するであろう。

憶え、生死無常の暗を、考えよ、汝の生の尊嚴を。

頭を低く久遠の本仏の前に垂れ、合掌して耳を大法の前に澄す時、汝は内へ内へと静かに喚ばれ、奥へ奥へと導かれて、清浄真実、歓喜の泉に魂を満されるであろう。我が真の同胞は、大法に充実せしめられつつ、大地の底に沈んでゆく。